

GSEF 国際会議の前に日本で「競争力」についてのやり取りがソウル宣言の会内部であった。この問題について更に議論を深めてみたい。

2018/8/18 に GSEF の議論に見られる「競争力」なる用語について明治大学中川教授から出された違和感を覚えるという主張に、堀利和さんより賛同する意見が出された。これに対して津田は競争力という用語には、「競争システム」という意味と「効率」という意味が含まれており、GSEF が使っているのは効率という意味であり、競争システムは否定されるべきであるが、効率を無視すると旧ユーゴスラヴィア自主管理のようにシステムが崩壊するので無視してはいけないと述べた。

この点を更に具体的に示したいと思います。以下は 2012 年に雑誌『世界』11 月号に編集者の依頼で掲載した拙稿「モンドラゴン協同組合－連帯が築くもう一つの経済体制－」の内容です。なお、津田の方法論はマル経でも近経でもありません。マル経の思想を近経の分析手法で開拓した独自のものです。

<モンドラゴン協同組合における経済体制論的分析>

- 1) 津田の方法論：経済体制の理念・価値を制度・システムで分析する。これは 2 つに分かれる。
 - 理念・価値（目標）を実現する制度・システムの分析
 - 効率を実現する制度・システムの分析
- 2) 協同組合は二兎を追っている。「理念・価値」と「効率」という二兎である。1) の分析方法で、モンドラゴン協同組合（MCC）は理念・価値と効率の両方を高いレベルで実現している理由を説明する。
 - ① 3 つの参加制度（所有参加、決定参加、利益分配参加）のどれもが株式会社とは全く異なる仕組みを MCC は持っており、これらが高めて高い効率と民主主義の価値の実現を果たした。
 - －所有参加・・・労働者が資本の 90% まで所有している。
 - －決定参加・・・労働者 30 人ごとに 1 人の代議員を選出し総会において 1 人 1 票で決定する制度
 - －利益分配参加・剰余金の 50% を労働者に分配する制度（現在は 30%）
 - ② 連帯という理念・価値を実現する制度・システムを連帯という手段で実現し、高い効率も果たした。
 - －報酬における連帯・・・格差を 3 倍以内に抑える連帯、協同組合間でも基準値の上下 10% が原則
 - －投資リスクを低下させる連帯・・・協同組合間でリスクを分散させる連帯
 - －地域社会や世界との連帯・・・剰余金の 10% を地域社会のために使う連帯
 - ③ 不況に立ち向かう連帯で MCC は効率を高め、公正等の価値の実現も果たした
 - －剰余金の資本化（10% 以外は利益分配などが銀行を通じて投資資金に回るシステムを作った）
 - －伸縮的労働時間（1 年の前半後半で労働時間を変更する）
 - －グループ間での配置転換で失業を防いだ（日本企業の制度をまねた）
 - －報酬政策（不況時には賃金は平均以下に下げる）
 - －財務改革（赤字経営では出資金から補填する等々）

MCC は連帯概念を使って価値と効率の二兎を追い、協同組合として高い境地に達した。津田はこのモンドラゴンのシステムを「連帯システム」と名付けた。イタリア協同組合にも別の連帯システムが存在す

る。MCCは強い特殊性を持つ協同組合であるが、連帯システムは一般性を持つ概念である。

以上の効率の問題とは別に、競争力には「競争システム」という意味を含む。競争システムの本質は以下の拙稿で扱っている。「資本主義経済体制を超えて－社会変革と連帯社会－」『にじ』No.642(JC総研)、2013年夏号。

<競争システムの本質>

競争は本質的に勝つか負けるかの勝負が根底にある。競争というしくみの基本的特徴は勝つことをめざす自己中心的行動にある。競争と対極にあるのは協力である。競争と協力は本質的に異なる。協力は力を合わせて目的をめざすが、競争は力を合わせるのではなく他者より優位な立場を築こうとする行動のことである。より優位な立場をとるために誰か又は何かを犠牲にしていくのが競争である。

従って競争は協力とは違い個人主義になりやすい。それだけでなく個人主義は競争のもとでは排除を伴う利己主義やエゴへと容易に転化していく。競争に勝つことが自己目的化し、勝負は多くの敗者を生み出し不安、嫉妬、敵意を広げていく。競争の世界は欲望の世界でもある。

評価・名声、金・財産、地位・名誉を獲得したいという欲望は勝つことによって満たされていく。奪うことが競争の本質の一部である。しかし欲望をともなう競争の世界には終わりが無い。欲望が競争を強め競争が欲望を強めていく。どのような勝者も明日は敗者になるかもしれない。負けてはおれない。熾烈な闘いが永遠に続いていく。勝者は少数であり敗者は多数である。

それとともに敗者の世界は底が深く悲惨でもある。ここでも弱い者が更に弱い者を攻撃する競争の世界があり心身症、薬物、暴力、殺人などがはびこっている。弱い者は絶えず排除されていく。排除も競争の本質の一部である。

競争はこのような不公正をもたらすために競争の支持者は正義を嫌う。競争と自由をすりかえて正義よりも自由の方が大切だと主張する。しかし米国では、そして今や日本でも競争と自由は一体であるというが、正義よりも競争だと主張しているのと同じである。正義の問題から逃げる者は、正義などは価値観の問題であり、科学ではなく政治の問題であると主張する。社会的な格差が広がり格差が社会問題化する時代においては、このような傍観者の態度は最後には孤立していくだろう。

生まれながらに人間は競争的なのではない。競争は学習により生まれる。特に競争が社会に構造化されてしまった社会ではお互いが競争することを教え学習している。この世界はマインドコントロールの世界であり、人間が互いにマインドコントロールをかけ合っている。しかし民族によっては競争的ではなく協力を重んじている場合もある。特に日本人は競争よりも協力を大切にしてきた民族である。欧州各国には協力よりも強い絆を意味する連帯という言葉があるが米国ではほとんど使われない。